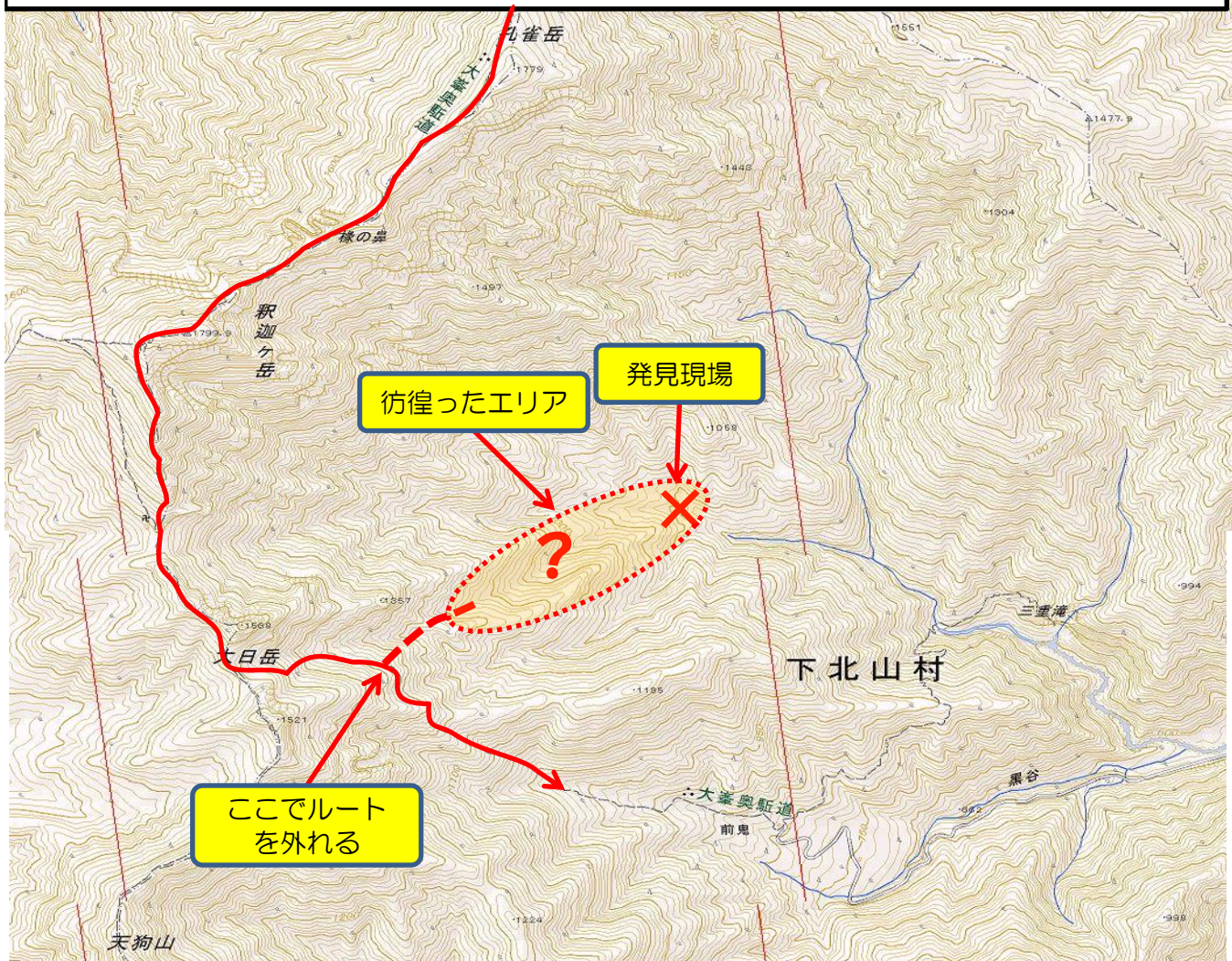


## 釈迦ヶ岳遭難(2011年8月)

69歳単独。激しい雷雨の中、前鬼までの下りを急いだため、いつの間にか道が無くなり、獣道になった。道に迷ったのだ。分かるところまで戻ればいいのだが、道迷いはそれを許さない。幻覚も幻聴も体験し、遭難してから6日後にヘリで無事救出された。



## 解説

激しい雷雨の中、下りに必死だった。いつの間にか道が無くなり、獣道になった。一度は30mぐらい戻ったが、他に道がなかったため、そのまま進んでしまった。獣道はさらに不明瞭になった。幅1mの川を渡ったが流され、眼鏡をなくした。道が分からずウロウロし、一夜を過ごす。翌日から山の中を6日間彷徨った。山の斜面を登ったり、下ったり方向が完全に分からなくなった。ふと右上を見ると電話ボックスが3台並んでいた。携帯が通じないからサービスで設置してくれていると思う、そちらに向かうが足が重くて動かないので諦める。幻覚が見えた。

一方、捜査は一旦4日後に打ち切られた。しかし、その後、地元消防団長の妻の「じっとしないで移動している」という話がヒントになり、6日後に1日だけの捜査が再開され発見につながった。ラッキーだった。

「おかしい」と思い、一旦は戻ったが、完全に分かるところまでは戻りきれなかった。「冷静」ではなかったのだ。現在位置が分かる所から「おかしい」と思った所まで、約15分しか下っていないのに戻れない。たった30分戻るだけで6日間彷徨うことはないのだ。気を付けたい「道迷いの心理」はこの点にある。